

藤田 議 「木」を修行する構造家

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■物づくりの環境

構造家・藤田議さんの修行歴を一言で語るのは難しい。1958年東京都目黒区に誕生。父が経営するプラスチック工場にはいつも職人さんがいた。母方の祖父が北海道新十津川町で野鍛冶から農機具を興していた。奈良県の十津川郷出身の人たちがつくった小さな町である。休みにいくと、農機具を修理する叔父達に囲まれた。だから自然にも物づくりを目指すようになった。しかし、得意分野の文系を活かして技術者になるには「建築しかない」と思ったのだ。東京大学に入学後も、「やりたいこと」探しは続き、内田祥哉研究室に行き着く。覇志堂が選んだ理由を聞くと「木材調査をすると知って」。藤田さんは「当時は、イヤ、今でも木のことは職人から学ぶしかないのです」と続けた。内田先生が始めた調査は全国に及んだといいます。

■「野の舞台」との出会い

竹内芳太郎「野の舞台」を読んだのが、藤田さんの人生に木との結びつきをさらに強くしてくれた。「近代建築は必ずしも人を豊かにしてはいない」と実感したといいます。藤田さんにいわせるとすべてが修行となるが、舞台美術家の立木定彦さん（2018年没）の事務所AZで働いたのが強烈だったという。贅沢にも学生をもう1年必要と、決心して留年。

立木さんのつくる舞台の手伝いで、苦難をものともしない強靱な精神を植え付けられたのでした。卒業設計では木造のフラードームを製作する。すでにフラワーの研究をしてい



た内田先生に文献をお借りできたのは幸運でした。

卒業して内田先生が推薦した熊谷組に入社。藤田さんが配属されたのは、新分野のオフィスファシリティマネージメント部で設計部門だった。ロンドンに出張してオフィス環境整備プロジェクトなど、その後役に立つ修行をした9年間であった。

5年間、国際交流基金で文化交流事業などに携わった後、国分寺の工務店に入り、大工さんに教わりながら木造の修行を始めたのです。

■木に浸る

その後、中国木材に入社して定年まで勤め上げる。プレカットのミスを許されない職人的技術も体験して「適性は構造設計なのだ」と、自分も周りも認めて活路を見出したのでした。

現在は藤田木造構法計画を創設して、木造の構造設計に特化して設計活動をしている。中大規模プレカット協会（理事/稲山正弘東京大学大学院農学生命科学研究科教授）の監事として木造標準工法の普及に努めテキストを執筆中で、木造建築の普及に尽力したいと意気込んでいる。

最近の木造建築の設計に対して一家言。RC造やS造では普通の建築が沢山建っている中で、木造にも稀に作品性の強い建築があるが、斬新な試みにチャレンジする傾向になり過ぎてはいないかと感じるのだ。木造設計の振れ幅が大きいのが気に掛かるといいます。

木というものは、単独で考えるものではない。本当の価値を知るには、森林のことから考えなければならぬのだ。

木の建築から離れていたときも木の建築フォーラムや増田一真さん主催の増田塾などで学び続けていたが現場で棟梁に怒られながら学んだことが財産だという。藤田さんは身体を使い山々を訪ね歩き、山林を見まわるのが生き甲斐だ。主伐や間伐に対しての考えも、言い始めたら尽きない山守のような構造家の藤田議さんなのです。